

成果報告書

記入日 2017 年 9 月 26 日

氏名 森 昭子	渡航先国名 ガーナ共和国	所属機関 ガーナ大学アフリカ学研究所
研究テーマ： アフリカン・ポピュラー・アートの文化人類学的考察「ガーナ南部の看板絵師の民族誌」		
研究期間： 2016 年 8 月 ～ 2017 年 7 月		
<p>研究成果（概要）本研究では独立後の都市化に伴い発展したポピュラー・カルチャーのひとつとしてあげられる看板絵が現在どのように製作され、看板絵師がどのような経済活動を営んでいるか調査した。ガーナ大学ではポピュラーアートやガーナアートに関わる文献、クワメ・ンクルマ大学では美術学部の卒業論文を収集し、首都アクラと古都クマシでは絵師に聞き取り調査、弟子入りし参与観察を行った。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>本研究はアフリカ諸国が独立を果たした 1960 年代以降に都市化や近代化に伴い発展したポピュラー・カルチャーのひとつとしてよく挙げられる看板絵のつくりである看板絵師が、インターネットの普及やグローバル化、印刷技術の発達により社会が変容する中で、どのように看板絵師になり、どのような経済活動を行い、どのような社会関係を営んでいるのかについて、首都アクラと古都クマシでの参与観察や聞き取り調査で明らかにした。またガーナ南部のアクラとクマシでの現地調査に前後してガーナ大学アフリカ研究所ではアフリカン・ポピュラー・アートとガーナ・アートの文献収集を行い、そしてクワメ・ンクルマ大学美術学部では卒業論文から 1980 年代のクマシの看板絵師の資料を入手した。以下詳細を記述する。</p> <p>（1）看板絵師になるには？</p> <p>街角を飾るカラフルな床屋や食堂の看板、トラックやタクシーの車体や窓を飾る諺や固有名詞、誕生日プレゼントや空間を飾るために注文される肖像画、これらはみな路上の看板絵師により作られるものだ。報告者は古都クマシで三ヶ月間看板屋「オールマイティ・ゴッド・アート・ワークス」の親方絵師クワメ・アコトに弟子入りし参与観察を行った。一弟子として朝はトイレ掃除から店準備を行い、看板をつくる技術を身につけ即戦力になると実際に注文に対応し、時に師匠の指示に従い時に作業をみて学び、あるいは兄弟子の助言を受けながら実践し、師匠の作品を模倣する習作に取り組み、最後は自由課題を与えられ報告者はアコトのスタイルのひとつである「文字」と「家族」を取り入れた絵画をひとつ仕上げた。</p> <p>参与観察を通して明らかになったのは、看板絵師は文字入れ、線描、彩色、塗装などを「状況的学習」によって身体化し、その技術を用いて製作し顧客に売り生計をたてる、主に男性が担う職業だということだった。まだ学校に通う十代の少年は授業が終わるとやってきて学び実践する。住み込み飯つきで働く二十代の青年は師匠が「修正（Retouch）」する最終段階まで、下書きから色づけまで一通りの業務をすべてこなす。弟子は特定の順番で技術を実践しながら身につけ、一通りの技術を身につけると依頼内容によ</p>		

ては最後まで一人で仕上げ、顧客からの売上をすべて懐に入れることが可能だ。

看板絵をつくるために弟子が最初に学ぶ技能は文字を「書く (Writing)」ことだ。様々な書体を参考にしながら、鉛筆やチョークで下書きし、絵筆やステンシルで文字を入れる。次は鉛筆で「描く (Drawing)」。鉛筆で下書きを行ったり、鉛筆画による肖像を贈答用によく注文を受ける絵師もいる。白黒赤青黄青の五色から様々な色をつくりだす「彩る (Coloring)」技術は、次の「塗る」技術に不可欠だ。また絵付けのように物質に彩色したり、シルクスクリーンを用いて衣服などに着色したりもする。最後の「塗る (Painting)」技術は長い鍛錬が必要で親方も弟子もこれを毎日繰り返している。建物の内装のような左官の仕事から海外コレクターに売る肖像画まで壁やベニヤやカンヴァス様々なものを塗る。

(2) 「文字 (Writing)」と「絵 (Painting)」を描いて売る —看板絵師の経済活動—

クマシの看板屋・通称「オールマイティ・ゴッド」とアクラの看板屋「ラティ・アート・スタジオ」の参与観察、そのほかの看板屋や、大道具や左官や額縁をつくる同業者、グラフィック・デザイナーや印刷業者の聞き取り調査で明らかになったのは、看板絵師とは「文字」と「絵」に関する知識と技術を共有して製作にあたり、親方を同じくする兄弟弟子どうしで仕事を共有し助け合い、印刷技術により需要が減ればその仲介業務で手数料を稼ぎ、電話一本もしくはふらりと訪れる海外コレクターには相応の高値で売りつける、したたかにしなやかに生き抜く職能集団だった。路上で暮らしていた乞食であろうが、チーフの孫「ナナ」に生まれようが、技芸があればパトロンがつき、なければグローバル化の荒波にもまれ淘汰されていく厳しい世界でもある。

顧客は主に評判を耳にして、または友人から紹介されてやってくる。徒歩圏からふらりと来るものもあれば、隣の州の田舎に必要な看板をわざわざ作りに街へでてくることもあり、また携帯電話一本で海外から「昔買ったこの絵をもう一枚ほしい」という依頼がくることもある。地域の盛んな商業とも密接に結びついており、自動車整備工場が多ければ車体への文字や装飾の注文がひっきりなしだし、商業地区であればそこに勤める個人が注文する贈答用の肖像画が売れ、漁村で飾り箱桶がつくられれば今でも彩色に呼ばれるのは看板絵師だ。印刷ポスターやバーナーが街に溢れ手描き看板の需要が減る中、「あそこは腕がいい」つまり上手に文字を書き、色を塗り、絵を描くという評判が看板屋にとって死活問題だ。印刷物の需要が増えれば、そこにアクセス出来ない人に代わり顧客のニーズを代弁し印刷所を往復し、最後は印刷物を商店に貼り付け看板に仕上げ、仲介料を稼ぐ。技芸で特定の顧客をつかみパトロンを得る一方で、「文字」と「絵」の知識と技術を駆使し万屋として奔走する。

グローバル化により看板絵師の仕事は変化した。彼らは相変わらず街の片隅で固有名詞や教訓といった生活の文字から、一般人や著名人、キリストや王母まであらゆる肖像を描き続け、そのしたたかな庶民の想像力を武器に生き抜く。ガーナの近年のポピュラー・カルチャー研究は映画などの公共圏に増殖するキリスト教的想像とモダニティ論が盛んであるが、報告者の師匠アコトも看板屋なのか伝道師なのか、生活は敬虔なキリスト教徒として律せられ、バスに乗れば声をはりあげ人々の安寧を説き、聖歌隊のバスの歌い手として熱心に活動し、日に何度も身体を激しく揺さぶり叫ぶ「祈る」行為により「絵のアイデアを得る」と語る、看板屋として伝道師として暮らしていた。たしかに「彩り」と「塗る」技術による写実主義的な絵で一定のパトロンをもつアコトの「喪にふす王母」勇ましく精悍な「アサンテの王」の肖像や、彼の祈りと聖書とトランスと想像の混交した「キリスト」と「サタン」の絵画、そして鏡にうつる己の「自画像」もまた、宗教的想像の発露する個であり、それがさらにパトロンの購入意欲を刺激する。

(3) 看板屋につどう人々 ―看板絵師の社会関係―

アクラでもクマシでも報告者が目にした看板屋は、たいていは大通りに面し、顧客や兄弟弟子や近隣住民が出入りする、開かれた賑やかな空間であった。物理的にも開放的で簡素な掘っ立て小屋はたいがい壁がないか天井がないか、つまり熱気がこもらないよう風通しをよくしているか、看板屋だとわかるようにあえて作品も製作様子も隠さない。アクラとクマシで調査を行った看板屋につどう人々は、エスニシティや同郷、宗教、兄弟弟子や地縁というゆるやかなネットワークにより繋がり、助け合い暮らしていた。

アクラのニマ警察署の向かいに位置する「ラティ・アート・スタジオ」では、鉛筆画の肖像を毎日淡々と取り組む現在の主ラティフを囲むように、同じ大親方シェリのもとで「書くこと (Writing)」と「塗ること (Painting)」を学んだ元弟子が看板屋につどい、仕事を助けるために自分の弟子をやったり、おのおの時間をすごしたり、パソコンを使い大統領選挙のシャツのデザインの作業を行うのに出会った。大親方シェリも、現在の主ラティフも、シェリの元で学んだラティフの兄弟子たちも、ラティフの下で学んだ元弟子、そして現在見習い中の弟子たちも、ここにいるのはみなニマ地区の出身でムスリムが多数であった。ニマは首都開発に捨て置かれた後背地で、ガーナ北部や西アフリカのイスラム教圏からの移民がおおくハウサ語が主要な地区である。ニマ警察署はニマのはしっこで、ニマ・マーケットのあたりには、シェリのように何人もの弟子を世に送り出した大親方ムサ、そしてそこで学んだいま現役の看板絵師が住まい、ニマを越えて経済活動を営み、SNS を駆使して自分の腕前を宣伝し、NGO や美術団体と接触し、活動領域を拡大している。彼らは「ニマ」出身であることを隠さずそれにより結束を強めているように見える。首都アクラには学校での美術教育を受けた美術家が活躍し、欧米の美術市場と直接結びつくギャラリーが増え、それに比べると彼らは無骨者で、ストリート的で、抵抗する都市生活者である。

(4) ガーナにおける「アフリカン・ポピュラー・アート」に関わる文献と展示

報告者はガーナ大学アフリカ研究所で、ファンテの戦士結社の旗「アサフォ・フラッグ」の研究者 Dr. Labi の指導のもと、UCLA の J. S. コールマン・アフリカ研究センターが 1967 年から発行する雑誌『アフリカン・アーツ』の主にポピュラーアートに関する文献を収集し年代ごとに特徴を分析した。また報告者が弟子入りした師匠アコト・クワメに関する、欧米やガーナの美術史家やキュレーターが執筆する文献も収集することが出来た。クワメ・ンクルマ大学美術学部では友人の学生や講師のおかげで卒業論文にアクセスし、1980 年代に多くの看板絵師が活躍した論文、当時の大学美術教育の学徒が看板絵師に批判的なまなざしを向ける論文、また報告者が参与観察をおこなったクマシのスアメ地区、アクラのニマ地区を 1990 年代の写真科専攻の学生が収めた文献を入手することができた。

ガーナ人美術家であり美術史家であるアタ・クワメが執筆し、ジョン・ピクトンが寄稿を寄せる『クマシ・リアリズム』は、都市クマシの美術シーンがダイナミックで豊かなのは、大学教育による美術家と路上の看板屋の二つの極による相乗効果だとする。六人の事例のうち、看板屋の例には報告者の師匠アコト・クワメが登場する。大学教育を受けた美術家の例にあげられた通称カリカチャは、看板屋で学んでから大学に入り美術製作を続けながら講師をする。カリカチャは報告者のインタビューに応え「看板屋を離れ大学に入ってから、長期休暇で故郷に帰るたびに看板屋に顔出してずっと交流を続けてきた。私にとって路上と大学に境界線はなく、ひとつの繋がった地平にある」。「文化＝芸術システム」によって説明されるアフリカ美術の暗黒の歴史は闇が深く、カリカチャの出現と言葉の意味を考えたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

今回の留学生活は二歳（滞在中に三歳）の息子連れでの初めての長期滞在でした。友人のつてを頼り首都アクラ滞在中はガーナ大学真裏の友人宅にホームステイしましたが、そこは母屋に女性と子供、離れに青年たちが住むという典型的な「ビッグ・ママ」が仕切るおうち、子供のパパたちは別居で通い。友人の娘と親戚の子供と新生児たちという未就学児集団の自宅保育の輪に入れてもらい大家族の中で育ちました。おかげで私はレゴンの森を毎日自転車でかけぬけ通学するという健全な生活。クマシの弟子入り中は師匠アコトの長女の部屋に住まわせてもらい常に家族と同行（家の鍵が古くて硬くて私には扱えなかった）、日曜の教会も木曜の葬式も、聖歌隊の夜練習も本番も、毎食のご飯も、ぜんぶ一緒、もれなく息子同伴。首都だろうが地方だろうが停電、断水は日常茶飯事で、なければいけない子供は慣れるのが早いもの。クマシでは現地の公立保育園に通いチュイ語が上達しましたが、最後の首都滞在中では家族ですごした時間も濃密で息子は完全に英語が優勢になり、帰国後それをどう保つかが悩みです。

今回の子連れ留学ではキリスト教と土着信仰のせめぎ合う世界に足を踏み入れることとなりました。クマシ滞在中息子が発熱嘔吐頭痛に悩まされ首都アクラに緊急搬送、私立病院で受診するも原因不明。在ガ邦人ご家族のエウエ族のヴォドゥン司祭のト占によると「クマシで妖術に攻撃され癲癩になる」という診断でした。息子のガーナ人祖父の実家は「アサンテの戦士を輩出した家系であるにも関わらず、子孫が祖先崇拜を怠り祖霊の怒りを買った」のだそう。司祭の指示により日本の家族に仏壇と神社で祈ってもらい、ガーナでは山羊と鶏を屠って「嫉妬による妖術と死に開かれた道を断つ」ための儀礼を実践。息子の体調は良くなりましたが、今度はそれを知った牧師である祖父側の怒りを買うことに。「ここはあなたの家なのだから問題があればすぐに言いに来なさい、悪魔払いならうちの教会で出来たのに！」最後のクマシ滞在中は回復した息子に目を光らせながら短時間で作品を仕上げ精根尽きました。

最後に、首都アクラでは息子とともに最先端のアフリカンヒップホップやハイライフ音楽、パームワインや伝統音楽のライブ、現代美術展やストリート・アート・フェスティバル、ポエトリーや舞台、映画上映会のトークショー登壇など、熱気のある創造と娯楽の場を昼に夜に楽しみました。

今後の社会貢献

まずは今回の留学・調査結果を用いて修士論文を完成させ、さらにアフリカン・ポピュラー・アートの研究を続けるべく博士課程への進学を考えています。フリーランスで行っているアフリカン・アートの制作コーディネーションの仕事を今後も続け、また今回弟子入りし持ち帰った習作の発表や展示、またさまざまな経験を書き物としてまとめることを考えています。現地でお世話になった看板絵師やクワメ・ンクルマ大学美術学部の講師陣、ガーナ人美術家や研究者にも還元できるよう、研究結果を英語で発表していきたいです。

ガーナ南部は女性の経済活動が活発でそのような研究も多くありますが、その中で私はガーナ人配偶者を持つ外国人妻・母たちが強く生き抜き、苦勞して経済的成功を獲得している姿を目にしてきました。日本でもアフリカ系移民と日本人配偶者を親にもつ二世の活躍が目覚ましいですが、ガーナで育った二世はそれを凌駕する勢いがあり、新しい世代の到来を感じました。その中で大半のアフリカ系のミックス・ダブルはアイデンティティの確立が難しい現実があり、これにながしかの形で貢献していきたいという想いがあります。



首都アクラのニマ出身の看板屋ニコラス・ワヨの弟子たち



クマシの看板屋・通称「オールマイティ・ゴッド」



絵師アコト・クワメの弟子入りで最後に仕上げた作品